木炭断面

「岩手木炭」の伝統的な生産技術

―高品質な木炭生産を続ける岩手の木炭業―

岩手大学　技術専門職員／森林インストラクター　岡田菜月

「岩手木炭」について

木炭は主に製法の違いによって黒炭と白炭に二分されます。蒲焼などで有名な備長炭は白炭ですが、火付けの容易さと強い火力が特徴の黒炭は、家庭での暖房や調理、BBQや炭火焼、鍛冶や茶道などに幅広く用いられてきました。豊富な森林資源を持つ岩手県はこの黒炭の日本一の産地です。

岩手県では、統一された規格の炭窯でナラやクヌギを用いて炭焼きされ、炭化率の低い部分を取り除き、不純物の程度の指標である「精煉度」の検査値が8度以内の黒炭だけを「岩手木炭」や「岩手切炭（きりずみ）」として販売しています。これらは火が付きやすく、不純物が少ないため煙や異臭も少ないという、消費者の使いやすさが保証された高品質の木炭です。長年にわたって高品質な木炭を生産し続けていることが評価され、土地の名前を冠した特産物名、地域ブランドとして農林水産省の地理的表示（GI）保護制度に登録されています。このような信用のおける「岩手木炭」が確立されるまでには、長年の努力がありました。

岩手切炭　写真提供：岩手県木炭協会

農山村民の生活を支えた木炭生産とその技術

製鉄などの鉱業における需要も大きかった岩手では、明治以前にも木炭が多く生産されていました。明治23（1890）年に東北本線が盛岡駅まで開通して木炭を東京市場に出荷できるようになったことや、凶作時の農村救済事業として生産が奨励されたことにより、岩手県の木炭生産量は増加していきました。製炭業は岩手県で、耕作可能な土地が少ない山村の人々にとって不可欠な重要産業となったのです。

この木炭生産の発展に大きな役割を果たしたのは、築窯（ちくよう）や製炭技術の改良・普及でした。森林地域で小規模分散的に行われる

岩手木炭の鉄路による出荷　岩手県木炭協会所蔵

木炭生産は、コツと勘による自己流の炭焼きとなりがちでした。それによる品質のばらつきや収炭率（原木を木炭に置き換える比率）の低さを克服するために、優れた製炭法を県内で統一的に実施してゆく努力が続けられました。古くは広島県から名人の楢崎圭三を招き、明治39（1906）年から志和村（現在の紫波町）山王海地区に製炭伝習所を開設して、築窯技術や包装調整等の教育を行った取組が挙げられます。その後も炭窯の改良や技術指導が続けられ、戦後の昭和27（1952）年に岩手県木炭協会が設立されたのち、築窯技術のいわば集大成として昭和31（1956）年に「岩手窯」が完成しました。県内の製炭法はこの「岩手窯」およびその改良型の「岩手大量窯」に統一されて現在に至っています。

岩手大量窯　写真提供：岩手県木炭協会

窯打ち（築窯）の光景　写真提供：岩手県木炭協会

しかし、優れた同一規格の炭窯を用いても、実際の炭焼きの条件は毎回異なり、良い炭焼きには優れた技術が不可欠です。模範製炭場での講習や普及員による普及活動が盛んに行われ、岩手県の木炭生産者の高い技術を下支えし、それが統一規格の炭窯とともに現在の高品質で収炭率の高い岩手木炭の生産に繋がっています。炭窯作り（築窯、窯打ち）や製炭技術の普及活動は現在も連綿と続けられています。

高品質な木炭生産と品質検査

技術の改良・普及とともに、県を挙げての品質検査も特筆すべき取組です。高品質の木炭のみを出荷して消費者の信用を得るとともに、都市部の問屋に安く買い叩かれないようにするため、大正10（1921）年には全国に先駆けて県営木炭検査が開始され、岩手木炭のブランド確立に貢献するとともに、木炭の公営検査制度が全国に波及する先駆けとなりました。公営検査は昭和49（1974）年に幕を閉じましたが、岩手県木炭協会によって「精煉度」の検査が行われるほか、平成2（1990）年以降現在まで岩手県木炭協会による岩手県木炭品評会が実施されており、木炭生産の技術向上を奨励する役割を果たしています。

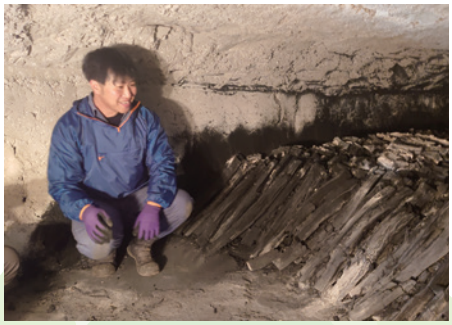
岩手県木炭品評会作品展

品評会での審査　写真提供：岩手県木炭協会

林業遺産「岩手木炭」の今後

このように、岩手県の高品質な木炭生産は、製炭技術や木炭品質の向上を目指す生産者・業界団体・行政による歴史的かつ継続的な努力によって築き上げられたもので、その総体が後世に引き継がれるべき価値があるものと認められ、2024年度に林業遺産に選定されました。

岩手県の木炭生産量は大正元年から令和4年まで日本一でしたが、生産者数や生産量は減少傾向にあり、令和5年の生産量第1位の座は白炭生産の盛んな高知県に譲る結果となりました。しかし、岩手木炭はGI登録に加え、近年では海外からもその品質の高さから引き合いが強く、輸出にも取り組んでおり、国内外から高い評価を得ています。また木炭の魅力を再認識し、首都圏からのUターン後に両親とともに木炭生産に励む若手生産者もおられます。林業遺産への選定が、炭焼きの技術に関心を持って次世代に引き継いでくれる後継者が登場する一助となることを期待しています。



若手生産者の一人、七戸宏大さん

一般社団法人 岩手県木炭協会：https://www.mokutan.jp/